

《記憶》 小野田 芳昂

記憶とは何か。脳に蓄積された情報。五感で感じ取ったことを微弱な電気信号で脳に伝達され、その情報を脳が常に記憶するのである。

本当にそうなのだろうか。人間の「記憶」というのは曖昧である。たとえば去年の10月4日は何をしていましたか、と聞かれてすぐに答えることの出来る人はほとんどいないだろう。しかし、全ての経験した情報を人間は覚えているはずなのだ。その記憶を頭のどっかの奥に仕舞っている。その人にとっては強烈な思い出、印象に残った出来事などがない限りは日々の記憶はどんどんと頭の奥においやられていくのだ。その追いやられた記憶はずっとそのままにされてしまうのだろうか。そうではない。何かきっかけで突如として引き出されていく。自分にとって直接関わりのある出来事だったり、全く関係のない場所で思い出したりするのだ。人間は死ぬ時に今までの人生の記憶が走馬灯のように駆け巡るそうだ。死ぬ瞬間、脳の記憶の鍵が解かれ、ダムが決壊するように溢れ出す。人はなぜ生きているのか、それは「記憶」があるからだ。悲しい、辛い、楽しい、うれしい、憎い、愛おしい……そんな全ての経験が人間に深みをもたらす。人間の記憶は曖昧だ。都合良くできている。辛いこと、悲しいことは時が経つにつれてどんどん薄らいでいく。うれしい、楽しい記憶だけが印象に残っていく。「記憶」は美しいままにさせようとしている。



写真は時間の「記録」であり、「記憶」である。その時、その瞬間の記録。「記憶」を視覚化できる唯一の手段。脳を駆け巡る乱雑で重なりあう「記憶」、そこに広がる私の世界を表現した。頭から足下までである写真と落書き、言葉、文字。様々な人が世の中にいる。その関わった人々の一人一人の考え方や人生観というものを全て把握することはできない。しかし、写真に写ったり、何か言葉を紡いだり、絵を描くことでその人物の人間性が垣間見れるのだ。その瞬間、私と相手の「記憶」が重なるのだ。この作品は私の「記憶」。作品を見ていただいている方に、ほんの少しでもいい、この「記憶」が残ってもらえますよう。何か「記憶」が重なり、新しい「記憶」が刻まれますよう。